阿岐のまほろば　Vol. 19

平成11年度　史跡安芸国分寺跡の発掘調査

史跡安芸国分寺跡（西条町吉行）

現地見学会の様子

史跡安芸国分寺跡は、東広島市西条町吉行に所在する現在の國分寺一帯の地下に眠る寺院跡です。その重要性から、昭和11年9月3日に国の史跡に指定されました。

天平13年（741）2月、聖武天皇の指示によって全国60余ヶ所で建立がはじまった寺院の一つですが、そこには古代安芸国内の民衆の力と英知が結集され、当時の最先端技術が用いられました。完成には長い年月がかかりましたが、奈良時代の終り頃には赤い柱に白い壁、緑色の縦格子と瓦葺という、壮大で荘厳な七堂伽藍の建物が建ち並んでいたようです。

天平文化の中心地として多くの人たちが参集し、賑わっていたことから、「国の華」もしくは「天平の華」と呼ばれていました。

東広島市教育委員会は、古代安芸国で唯一のこのかけがえのない寺院跡を多くの人々が活用し、そこから先人たちの生き方を学び、それを現在、さらに未来の生活に活かすとともに、生活の安らぎを実感できる歴史的文化遺産として捉え、歴史公園とすべく保存整備事業に着手しました。

平成10年度に基本計画を策定し、これに基づいて、当事業団文化財センターが委託を受けて発掘調査を実施しています。

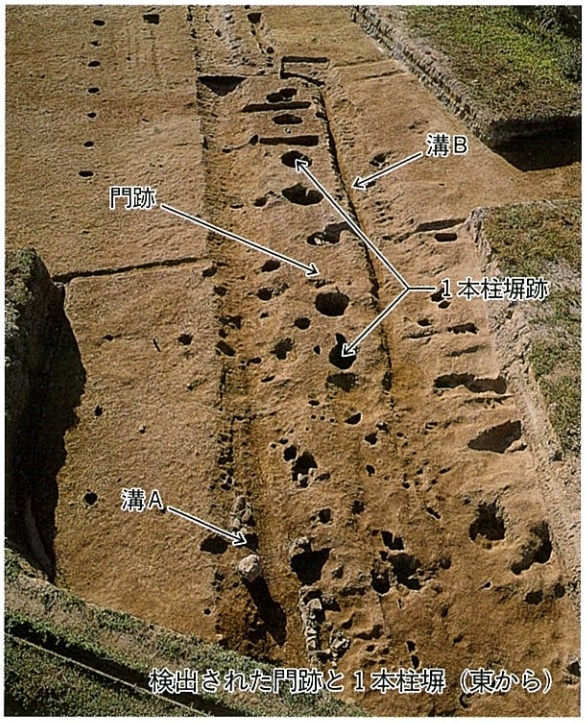
北辺区画施設の調査（第９次調査）

安芸国分寺跡の寺域北辺を確認する目的で、平成11年８月から10月まで史跡指定地の北端の発掘調査を実施しました。

この地点は、昭和45年度の確認調査で溝が２条確認されています。また、昨年度予備調査（第８次調査）を実施し、２条の溝と柱穴、さらに多量の瓦や土器が出土したため、寺域の北辺を区画する施設が明らかになることが期待されていました（文化財センター報14参照）。

調査の結果、東西に一直線に伸びる幅1.5m前後、深さ0.3m前後の溝を検出しました（溝A）。また、その北側でもこれに平行する溝を検出しました（溝B）が、溝の西端は南に折れ曲がり、南側の溝と合わさることが明らかとなりました。このため、調査区の東側はA・B２条の溝が平行して続きますが、西側は溝Aが１条だけ伸びています。また、南側の溝Aには拳大から人頭大の石や瓦を積み上げて、溝護岸の外装としていました。

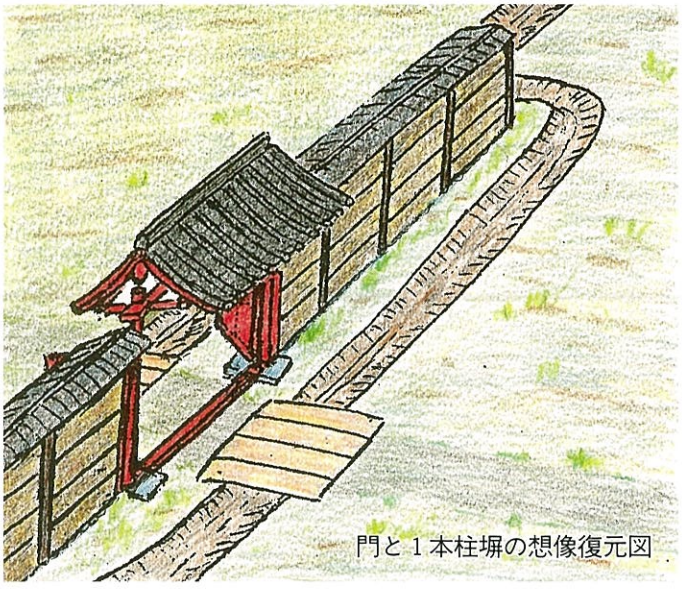
ところで、この東西に伸びるA・B２条の溝の間の距離は、２m前後を測りますが、その中央では溝に沿って並ぶ柱穴を検出しました。一部の柱穴については間隔が揃っておらず、接するものもみられることから、柱の建て替えなどを考慮する必要があります。上部の構造は、一定間隔で柱を建て、間に板壁を入れた１本柱塀と呼ばれるものです。両側の溝A・Bが雨落ち溝として利用されたとすると、板壁の上には板屋根が葺かれていたと考えられます。１本柱塀の延長は、約20mを確認しました。



検出された門跡と１本柱塀（東から）

また、この１本柱塀の中央付近では、溝Aを中心に狭い範囲で多量の瓦が堆積している場所（瓦溜り）がありました。昭和45年度の確認調査でこの瓦溜りの西端が確認されており、昨年度の予備調査で東端を調査しています。今回の調査でその全容が明らかとなりました。

瓦は、溝Aが若干埋まった時点でその中に廃棄されており、一部はその周辺にも広がっていましたが、大半のものが割れて小さな破片となっていました。瓦溜り範囲は東西約６mで、この中央部分の柱穴の距離が最も広いことから、この部分に門が建てられていたことが考えられます。門の構造は、両側の柱で屋根と扉板を支えた一間棟門と呼ばれるもので、扉は観音開きと考えられます。また、溝A・Bには板橋が架けられており、屋根には瓦が葺かれていました。門の幅は約2.5mを測ります。


門と１本柱塀の想像復元図

講堂跡の調査（第10次調査）

安芸国分寺跡の講堂跡基壇の規模を確認する目的で、平成11年11月から12月まで講堂地区の発掘調査を実施しました。

講堂とは、僧侶たちが講義を受け、経典を学ぶ場所で、彼らが一同に会していた建物です。また、建物の基礎は土を壇状に盛ることから、「基壇」と呼ばれています。

検出された講堂跡と軒廊跡（北から）

調査は、建物基壇の北端辺と東端辺を対象とした結果、東西約31m、南北19m前後、高さ約1mの規模をもつ基壇が明らかとなりました。

この基壇は、後世の水田耕作などによって上面が削平されていましたが、地表面を整地し、その上に土を盛ったもので、外装として花崗岩を利用した人頭大程度の化粧石を乱石積していることが明らかとなりました。北端辺では、この化粧石がほぼ全面に2から3段残っています。また、東端辺は化粧石が全て抜き取られていましたが、その外側に掘られた雨落ち溝を確認しました。

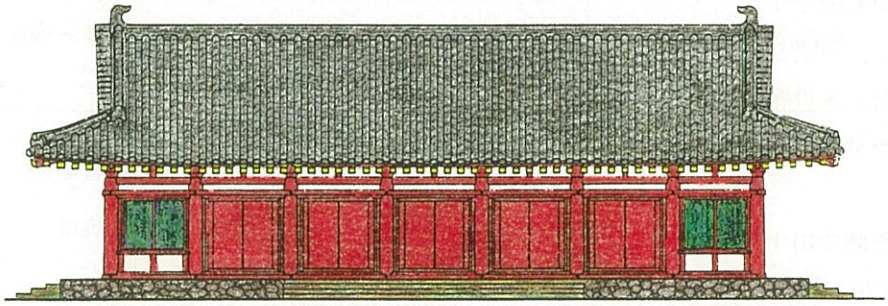
講堂の柱が乗っていた礎石は、2個残っていました。どちらも花崗岩製のものですが、上面に造出しなどの加工はされていません。基壇を構築した後、上面から据付け穴を掘り、中に礎石を置いています。

基壇の規模や礎石の距離からすると、講堂の規模は、桁行（東西方向）7間、梁間（南北方向）4間と考えられます（柱間の数を○間と呼びます。講堂の柱間の距離は3～4mありました）。

また、講堂跡の北側中央では、人頭大程度の石を2列並べ、間に土を盛った通路状の基壇を検出しました。幅は約6.5mで、長さは約8mです。基壇の上では柱が乗る礎石を確認したことから、屋根が葺かれていたことが明らかとなりました。こうした施設は、「軒廊」と呼ばれるものです。和歌山県の紀伊国分寺跡などで発見されていますが、国分寺ではあまり例がありません。その北側にも別の建物基壇を確認したことから、これと講堂を結ぶ廊下として利用されていたと考えられます。

ところで、講堂基壇の外周と軒廊の両側には雨落ち溝がそれに沿って存在しますが、この中には多量の焼土が炭とともに広がっていました。とくに焼土は軒廊基壇の周囲が厚く、周囲に散在する瓦なども火を受けた様子が見られることから、軒廊は火災によって倒壊したことが考えられます。また、講堂跡の建物基壇側の軒廊基壇上には、講堂の雨落ち溝が確認できることから、軒廊倒壊後も講堂だけが存続していたことが考えられます。

なお、軒廊跡の北側で見つかった建物基壇については、僧房跡と考えられ、今後の調査が期待されます。


講堂復元想像図

史跡指定地周辺の調査

この他に、安芸国分寺跡の寺域西側の範囲を確認する目的で、平成11年10月から平成12年1月まで史跡指定地の西外側の発掘調査を実施しました。

調査の結果、基底部の幅が4.5m前後、残存高0.3から0.5m程度を測る地山の削出しを確認しました。この遺構は若干蛇行しつつ南北に伸びていましたが、一部には上面に盛土も見られました。延長は約30mを測ります。

詳細については、今後の調査を待たなければなりませんが、位置的には南に存在する塔跡よりも西側に伸びること、また、構造は上に土を盛った土塁状となることなどから、寺域の西側を区画する施設と考えることができます。

検出された土塁状の施設

☆トピックス

第10次調査で、海獣葡萄鏡が出土しました。海獣葡萄鏡とは、中央の紐を通す鈕の周囲に獣を4から6匹配置し、その外側に動物や葡萄と五葉、さらに最も外側に唐草をめぐらすものです。

7世紀後半から8世紀にかけて、中国の唐で作られ、わが国にも輸入されました。8世紀からはそれを模倣したものが国内でも多量に作られています。

この海獣葡萄鏡は、講堂跡の西側で出土しました。漆黒色をした小さな破片ですが、縁の一部で、内側に葡萄と五葉、外側に上下に巻く唐草を陽鋳

出土した海獣葡萄鏡

しています。また、断面は三角形をなしており、復元される直径は約12cmです。

同様な鏡は、奈良県明日香村の高松塚古墳でも出土していますが、これと比べても文様が精緻で、鋳上がりがとてもよく、初期の文様を踏襲しています。唐から輸入されたものですが、その後、どのような経緯でこの安芸国分寺にもたらされたのでしょうか。謎です。

歴史公園の基本計画書できる!!

史跡安芸国分寺跡を歴史公園として保存整備するための基本計画書が出来上がりました。発掘調査はこれに沿って進めており、その結果に基づいて保存整備事業を実施します。

この整備基本計画書「よみがえる天平の華」は、東広島市教育委員会で配布（無料）しています。

現地事務所が完成する!!

史跡安芸国分寺跡の中に「安芸国分寺歴史公園整備事務所」が完成しました。発掘調査で出土した瓦や土器などの接合や復元などを行っています。

お気軽に、見学しに来てください。お待ちしています。　　TEL（0824）24―5234（FAX共）

㈶東広島市教育文化振興事業団　文化財センター報
阿岐のまほろば Vol. 19
発行日　2000（平成12）年3月29日
編集・発行　財団法人東広島市教育文化振興事業団/文化財センター
東広島市西条町大字馬木541―1
TEL 0824―25―3880　〒739―0033
印刷　電子印刷株式会社
広島市中区堺町1―1―5